

# 小池平遺跡発掘調査報告書

茨城県行方郡玉造町八木蒔

2003年12月

玉造町遺跡調査会  
玉造町教育委員会

## 序

茨城県の南部に広がる湖、霞ヶ浦に面している玉造町は、町中央部を梶無川が流れ、北西には鎌田川があり、小川町と町境をなしています。古くから農業で発展した地域で今でも行方台地では畑作を、沖積低地では稲作やイチゴ栽培が盛んに行われています。

これらの台地には、考古学上貴重な遺跡や遺物が眠っており、原始古代から現在に至る人々の営みを知る重要な歴史的文化遺産となっています。

今回の調査は、当該遺跡内を通る町道10号線の拡幅が計画され、文化財保護の観点から十分に協議を重ねた結果、計画変更是困難であることから、遺跡の記録保存を目的に実施されました。平成5年の町道2、427号線改良工事に伴う緊急調査に続き、当時の集落や境界等の一端を知ることができました。調査が工事にかかる道路拡幅部分ということもあり、遺跡の全体像は掴めませんでしたが、当遺跡の保護保存に力を注ぎ、玉造地方の歴史文化の研究と伝統文化の継承に努力していく考えです。

調査に際しましては、玉造町建設課、地元地権者の方々のご理解をいただくとともに、全般的なご支援を賜り無事に終了することができました。また、調査の担当をしてくださいました汀安衛先生はじめ調査協力者には心より敬意を表し、この報告書が郷土をより深く知る上で、広く一般の方々にもご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、ご指導賜りました茨城県教育庁文化課、鹿行教育事務所、地元の関係各位の深いご理解とご協力を賜りましたことに厚く感謝を申し上げ、ご挨拶といたします。

平成15年12月

玉造町遺跡調査会  
玉造町教育委員会教育長

大崎博之

## 例　　言

- 1 本報告書は、茨城県行方郡玉造町八木蔵小池平1013-3番地他に位置する小池平遺跡の調査報告書である。
- 2 本調査は、町道10号線の拡幅改良工事に伴う発掘調査で、対象面積は約900m<sup>2</sup>。
- 3 発掘調査は平成15年5月14日から31日まで行い、その後整理を開始した。
- 4 調査部分は、以前から農地として使用されており耕作土下には、戦後の溝、甘藷の貯蔵穴等多くの機能が見られた。
- 5 調査会組織

会長	大崎 博之	(玉造町教育委員会教育長)
副会長	風間 亨夫	(玉造町文化財保護審議会会長)
理事	宮崎 幸男	(玉造町文化財保護審議会委員)
	鈴木 亮然	(玉造町文化財保護審議会委員)
	八木 操	(玉造町文化財保護審議会委員)
	笛目 吉久	(玉造町文化財保護審議会委員)
	田宮 みつ	(玉造町文化財保護審議会委員)
	小沼 政雄	(玉造町文化財保護審議会委員)
	堀田 好男	(玉造町文化財保護審議会委員)
	汀 安衛	(鹿行文化研究所代表 調査主任)
監事	田山 信男	(玉造町文化財保護審議会委員)
	大場 浩一	(玉造町文化財保護審議会委員)
事務局	重田 順爾	(玉造町教育委員会生涯学習課長)
	中田美代子	(玉造町教育委員会生涯学習課社会教育係長)
	森作 知代	(玉造町教育委員会生涯学習課社会教育主事)
	磯山 智也	(玉造町教育委員会生涯学習課主事)

## 凡　　例

- 1 本報告書の縮尺は図中に表示したが、原則として1/30、1/10とした。水糸レベルは図中に表示した。
- 2 本報告文・写真・遺物実測は汀安衛、図面は西田和子、遺物整理は徳利初代が行い、汀安衛が総括した。
- 3 本調査にあたり次の方々に協力をうけましたので、これを記して感謝の意を表したい。  
茨城県教育庁文化課、玉造町建設課、玉造町教育委員会、玉造町中央公民館、小田俊男、徳利初代、横田泰隆、橋本光枝、西田和子、行方地方広域シルバー人材センター、須貝勇、平間鉄男、飯田貞夫、里村滋紀、松本秀子、柳瀬秀夫  
(地元関係者) 八木蔵区長 千ヶ崎武男、千ヶ崎正英  
(表土除去) 橋川英治

## 抄 錄

ふりがな	こいけだいらいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	小池平遺跡発掘調査報告書							
発行者名	玉造町教育委員会、玉造町遺跡調査会							
所在地	〒311-3511 茨城県行方郡玉造町乙 1179							
編集者名	汀 安衛							
編集機関	鹿行文化研究所							
所在地	〒311-2211 茨城県鹿嶋市青塚 718							
発行年月日	2003年12月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
小池平 遺跡	茨城県 行方郡 玉造町八木崎 1013-3 他	市町村 08425	遺跡番号 075	36° 7' 45"	140° 24' 15"	20030514 20030531	900 m <sup>2</sup>	町道10号 線改良工 事に伴う 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小池平遺跡	集落跡	奈良時代末から 平安時代初頭	住居跡、溝、 土坑	土師器壺、壺、 須恵器壺、盤、支脚				

## 目 次

序 文

例 言

凡 例

目 次

図 版 目 次

### I 遺跡の位置と史的環境

### II 調査に至る経過

1 調査に至る経緯

2 調査日誌

### III 調査の概要

### IV 遺構と遺物

1 1号住居跡

2 2号住居跡

3 3号住居跡

4 4号住居跡

5 6号住居跡

7 7, 8号住居跡

8 9号住居跡

9 10, 11, 12, 13号住居跡

### V 土坑

1 1号土坑

2 2号土坑

3 3号土坑

4 4号土坑

### VI 溝

1 1号溝

2 2, 3号溝

3 4号溝状遺構

### VII 総括

## 挿図目次

- 第 1 図 小池平遺跡位置図と周辺遺跡
- 第 2 図 調査区と遺構位置図
- 第 3 図 1号住居跡と出土遺物実測図
- 第 4 図 2号住居跡実測図
- 第 5 図 3号住居跡と出土遺物実測図
- 第 6 図 4号住居跡と出土遺物実測図
- 第 7 図 6号住居跡と出土遺物実測図
- 第 8 図 7, 8号住居跡と出土遺物実測図
- 第 9 図 9号住居跡と出土遺物実測図
- 第 10 図 10, 11, 12, 13号住居跡と出土遺物実測図
- 第 11 図 1, 2, 3, 4号土坑実測図
- 第 12 図 1, 2, 3, 4号溝、溝状遺構実測図

## 図版目次

- PL 1 調査前の状態左上、確認時右上、中左、1号住居跡遺物出土状態  
1号住居跡完掘
- PL 2 2号住居跡完掘右上、3号住居跡確認と1号溝中左、遺物出土状態中右と完掘
- PL 3 4号住居跡土層、遺物出土状態、完掘 6号住居跡遺物出土状態、完掘
- PL 4 7, 8号住居跡完掘遠景、7号住居跡土層、完掘、8号住居跡遺物出土状態、9号住居跡調査光景、同遺物出土状態
- PL 5 9号住居跡遺物出土状態、完掘、10号住居跡完掘、11号住居跡完掘、12号住居跡完掘、13号住居跡完掘
- PL 6 1号溝層序、2, 3号溝遠景、4号溝道状遺構？2, 3号土坑
- PL 7 1, 2, 3, 4号住居跡出土遺物
- PL 8 5, 6, 7, 9号住居跡出土遺物
- PL 9 10, 11, 12, 13号住居跡出土遺物

## I 遺跡の位置と史的環境（第1図）

本遺跡は、茨城県行方郡玉造町八木蔵1187-1番地他に所在する。玉造町は茨城県の中央部や東寄りに位置している。玉造町は、西側は霞ヶ浦（西浦）に面し南側は麻生町、東側は台地中央部で北浦、鉢田両町に接し北側は、鎌田川を挟んで東茨城郡小川町と堺を接している。町域は全体的に台形状を呈する。

本遺跡は、分布調査から西浦と梶無川に挟まれた半島状台地中央部に占地していると思われる。中心は台地中央部、平坦面に近いところに所在すると思われる。遺跡の占地する台地には縄文時代後期の八木蔵貝塚①が近く、古墳時代の捻木遺跡、中世の塙館跡など縄文時代から近世までの多くの遺跡が確認され、残されている。

縄文時代の貝塚では中期阿玉台式～加曾利E式主体のオチャク内貝塚、古墳では捻木古墳群、城館址では塙館跡、芹沢城跡、山中館跡、玉造城跡等が残され梶無川と西浦に挟まれた台地は、古代から生活環境に恵まれた地域であることが窺われる。

小池平遺跡は、台地中央部に位置し、標高30m程を測り、ほぼ平坦に近い部分に占地している。前回の調査では台地端では確認されず（注1）今回の調査区近くから6軒ほどの住居跡が検出されている。

（注1）平成4年山武考古学研究所によって調査され奈良末から平安初頭の住居跡が検出されている



第1図 小池平遺跡位置図と周辺遺跡

## II 調査に至る経過

### 1 調査に至る経緯

玉造町建設課から、町道10号線改良工事に先立ち平成14年4月26日付けで、玉造町教育委員会に工事予定地内における埋蔵文化財の有無の照会があった。教育委員会は道路予定地内に周知の遺跡「小池平遺跡」が所在し、遺跡部分の工事をする場合には発掘調査による記録保存が必要な旨平成14年5月14日付けで回答した。平成15年3月27日に確認調査を行った結果、道路予定地内に奈良時代～平安時代にかけての遺構が確認された。玉造町教育委員会は文化財保護の立場から、その保護と取り扱いについて茨城県教育庁文化課の指導の下、町建設課と協議を重ねたが、計画変更は困難であることから記録保存の措置を講じることとなった。

発掘調査にあたっては、鹿行文化研究所の汀安衛氏の協力を得て、平成15年5月14日から5月31日の期間で調査を実施することになり、期間内に終了した。

### 2 調査日誌

調査は、既存の道路改良拡幅工事の為現道の両側に2m乃至4m程拡幅される。道路の両側に付随した調査区域であり調査には交通、残土置き場等多くの課題があった。

以下、調査過程を日誌から抜粋し述べる。

- 5月14日 前年度の試掘、確認調査に従って道路北側から耕作土を重機で排土、遺構確認作業に入る。1号土坑、1号住居跡確認、午後から調査を開始する。
- 16日 重機により耕作土除去、調査続行2号住居跡、2号土坑調査開始。
- 17日 1号住居跡出土遺物実測し取り上げ。2号住居跡調査、遺物少ない。
- 20日 シルバーパークセンターより人手を確保。2号住居跡土層、平面図作図。
- 21日 2号住居跡ピット調査。3、4号住居跡土層作図。
- 22日 2号住居跡平面図、3号住居跡平面図作成。4号住居跡平面図作成。7、8号住居跡調査開始。
- 23日 7、8号住居跡調査、土層作図、平面図作図。9号住居跡調査開始。  
9号住居跡は電柱の支柱があり、調査にかなりの制約を受ける。
- 5月27日 9号住居跡調査、大型の住居跡。4号溝、道調査。
- 28日 6号住居跡調査、5号住居跡は竈のみ。10、12、13号住居跡調査開始  
9号住居跡遺物平面図、土層図作成。
- 29日 11、12、13号住居跡調査。5、6、9号住居跡竈調査。
- 30日 12、13号住居跡平面図作成。
- 31日 1号住居跡の平面図、断面図、4、11号竈精査。本日すべての作業を終了とする。遺構はかなりの数を確認、調査したが總べて一部、もしくは大半がエリア外に位置し全掘出来たものは2号住居跡のみであった。

### III 調査の概要（第2図）

調査は、既に調査日誌で述べたとおり遺構の大半、又は一部をエリア外に位置していた。確認調査時は農作物の関係で全城の確認は出来なかつた。

よつて本調査では、遺構の数は予想を上回る数になつた。町道改良、拡幅工事の為の調査であるため宿命的なことに調査区は、現道の両側に最高4m、最低1mと極端な制約のもとでの調査になつた。

また農作物の関係で残土置場の場所の設定にも制約があつた。

確認調査の時点と、調査時の遺構の有無を確認し、土置場を確保した。

以上のような状態での調査になつた。

遺構の大半は住居跡で、都合13軒、土坑4基、溝3条、道状遺構1が検出された。

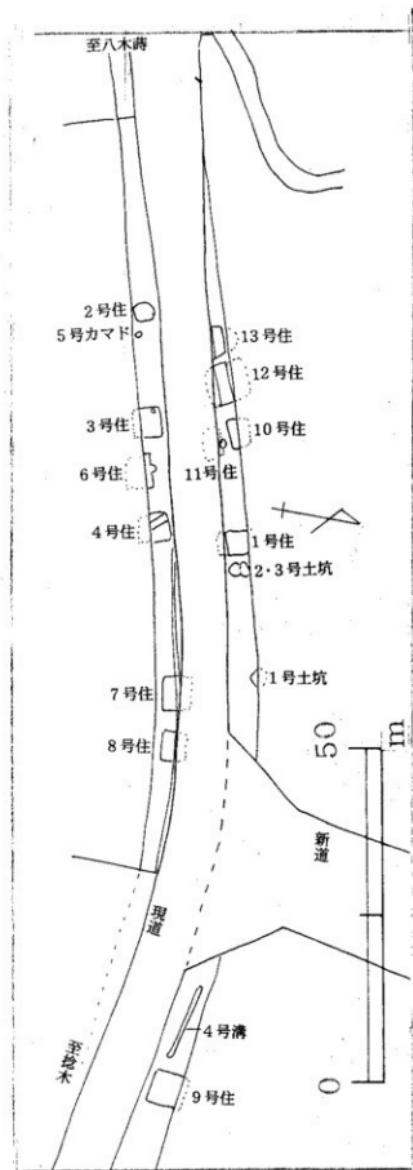
検出された住居跡は、北側に龜を有するものと無いもの、北から東に造り変えたもの等が見られた。

いずれも調査区範囲での状態である。全掘出来たなら確定的なことも言えるが大半を調査区外に位置する遺構群が大部分であった為確定的な事は断言出来ない。

溝、道路状遺構としたのは前回の山武考古学研究所が調査した時の遺構と同一のもので調査時点では溝として捉えたが、「道」とは断定しかねた。よつて本報告書では溝とした。

（平成4年の調査報告書）

（遺構の位置関係は道路が東西方向に走行しているので道路南側、北側と表現した）



第2図 調査区と遺構位置図

## IV 遺構と遺物

### 1 1号住居跡（第3図）

本住居跡は、道路北側に位置し検出された。上部は畠地のため擾乱を受けている。主軸をN-30°-Wに置き、東西方向で3.8mを測る方形プランを呈すると思われる。南側は調査区外になり全容は把握出来ない。

掘り込み深さは5.0~6.0cmで垂直な掘り込みが見られ、西側には周溝が認められた。

覆土は、レンズ状の自然堆積を示し8層に分けられた。いずれも暗褐色、褐色で白色の粘土、焼土、砂質粘土等の混入の差があり、粘性、締まりはややある。層序から本跡は竈の構築と合わせて替えが推定できる。

竈は、北壁と東壁に見られたが北側の竈は削りとられ僅かに遺構外側の部分に砂質粘土と煙道状の焼土が見られたが擾乱、崩壊が激しく明確には捉えられなかった。東側の竈は住居跡の廃棄まで使用されたものであるが袖部は取って付けた感じの粗雑な作りであった。竈袖、煙道部から3、4の須恵器坏が出土している。補強材的な状態の出土。

床面は前述の様に凹凸が見られた。東側の竈前面は良好な締まりが見られ、良く踏み固められていたが、その他はやや悪く、柱穴は検出できなかった。

遺物は投げ込み的に2層から小破片がかなり出土したが完形品は皆無でいずれも復元により六割前後から九割前後にになったもので、ほぼ器形と形態が把握できる。

出土土器は、土師器、須恵器であり須恵器の割合が多い。図示した1、2は高台付き、3、4、5は平底で6、7は土師器小型甕である。高台は直立気味の1と「ハ」の字状に弱く開き、長めで器形からは皿状、盤状に近い。体部は直線的に開く1と器肉を減じながら開き口唇部を丸く治める3、4とカット気味の5がある。1、3は土師器で1は内黒。

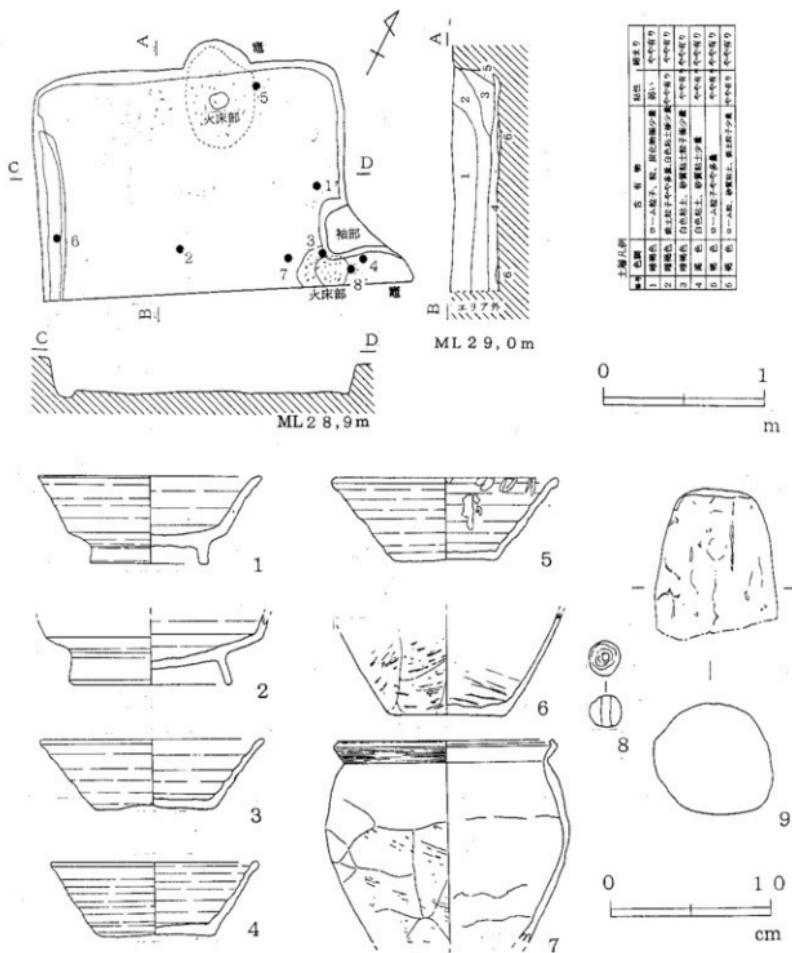
成形は總べて機械で成形痕を残している。底部はヘラ削り調整がなされている。口径1.4~1.5cm、高さは4.5~5cmとほぼ均一している。胎土には雲母、長石、細石を多量に含むものと少ないものの二種類が見られた。

甕は、器肉が2~4mm前後と薄く器面は粗雑なヘラケズリ調整がなされている。胎土は長石、細石を多量に含む。器形は平底から内湾気味に立ち上がり、頸部は（く）字状で口唇部は丸く收め、内傾気味を呈する。7、8は器肉の薄い小型の甕で粗いナデ、ヘラケズリ調整がなされ長胴形を呈する。口唇部は内側に短く内傾する。

9は、土製支脚で1点欠失したものが見られた。西壁側の周溝から出土している。やや丸みを持ち、下部を欠しているが三角形状形態と思われる。本住居跡の前段階の時期か、時間的な差が見られる。

その他、東側の竈上から土製丸玉が1点出土している。重さ8g。

出土遺物からは奈良時代末に1期目の住居跡が作られ、東竈の2期は平安時代初頭に位置づけられる。本住居跡は2つの時期に分けられる。



第3図 1号住居跡と出土遺物実測図

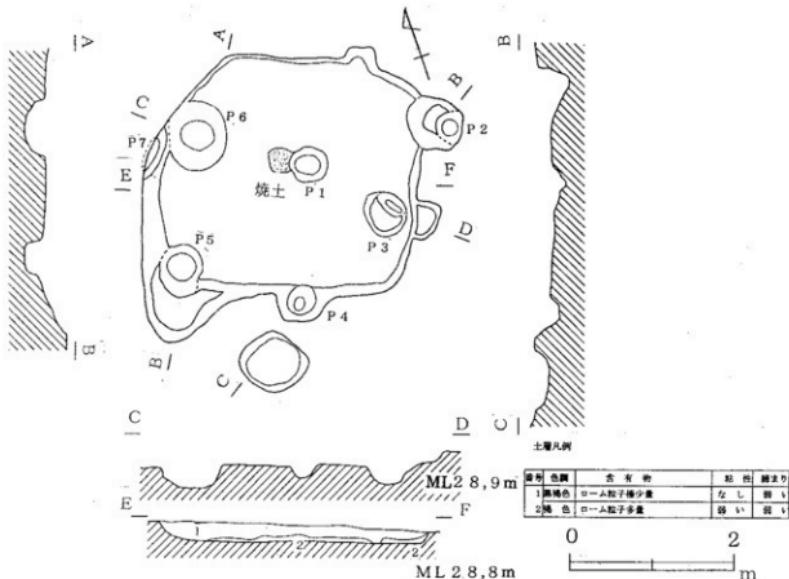
## 2号住居跡（第4図）

本住居跡は、道路南側の調査区、最も西南に位置して検出された。主軸はN-29°-Eに置く。東西3.2m、南北2.5mを測る長方形形状プランを呈する。一応住居跡とし後述べする。

覆土は、2層に分けられたがそれ程の差異は見られない。確認面は黒褐色で、掘り込みは30cm程と浅い。床面は東側に僅かに傾斜を示している。

中央部に焼土が見られ、床面は僅かに赤褐色に変化していたが所謂「炉」の感覚はなく、掘り込み認められない。周辺からは合計7基のピットが見られ規模、プラン、掘り込み深さは等は一定しない。いずれも径30cmから70cm程の円形状プランを呈し掘り込みは20~30cmと浅い。中央にも20cm程の小穴が位置している。いずれのピットも位置的に柱穴とは推察出来ず、変則的な掘り方である。覆土は2層、自然堆積状態で黒褐色、褐色で締まり、粘性は弱い。

遺物も総数35片と少なく土師器細片が大部分で、図示出来るものは無かった。遺物から判断して近隣の住居跡と時期的には差異はないと思える。時期、使用目的の判断に躊躇する遺構である。



第4図 2号住居跡実測図

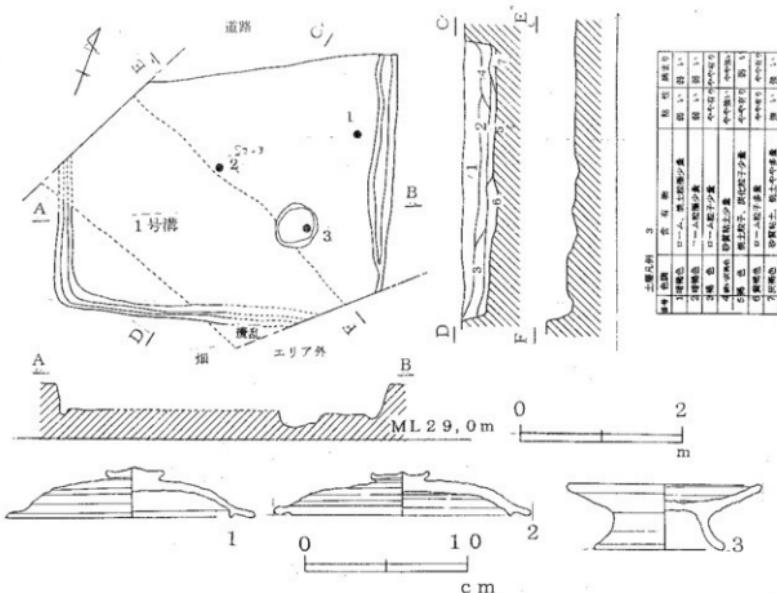
### 3号住居跡（第5図）

本住居跡は、2号住居跡の東側に位置し10m程離れて検出された。北側と南側の一部を調査区外に置く。主軸をN-18°-Wに置き、東西4.1mを測る。南北方向は道路部分が未掘たため竈も不明。遺構中の西南部に斜めに1号溝が掘り込まれて攪乱を受けている。掘り込み深さは30cm程で、立ち上がりは弱く傾斜を示す。周溝はやや深めで幅広である。

覆土は、7層に分かれるが埋積状態、層序からは自然埋積と理解される。確認面と2層は暗褐色で3層から褐色底部に粘土塊、面があった。上部は締まり、粘性は弱い。下部はややある。竈は、北側が道路の為未掘、不明である。出土遺物から北壁を持つと思われる。

床面は、溝で攪乱されている以外はやや締まりを持つ。一部に甘藷貯蔵穴の攪乱部がある。

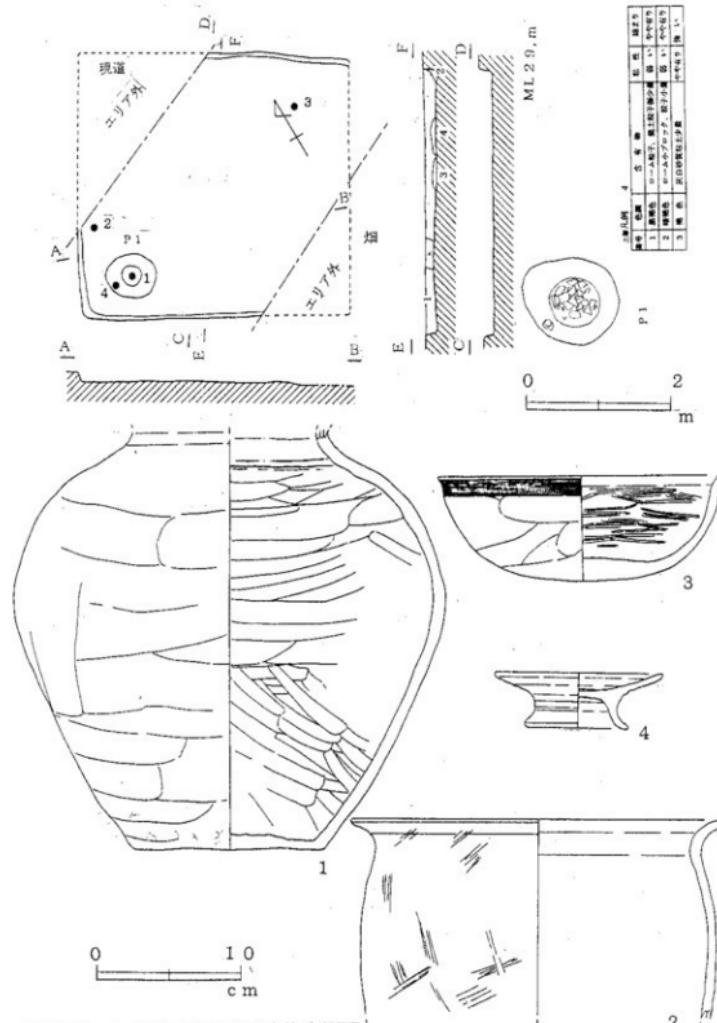
遺物は少なく器形の判る物に土師器破片と須恵器蓋、台付き皿が出土している。図示した1、2はカエリ、宝珠摘み、膨らみが対照的である。1は全体に膨らみを持ち、天井部に宝珠形摘みをもちカエリはやや丸みを持つ。端部は丸く長く伸びる1と、カエリが三角形状で端部は短く膨らみも弱く摘みも扁平な2がある。3の皿は高台が長く「ハ」の字状に開く。檻櫛成形、ナデ調整で口径12cm。本住居跡の年代は2の須恵器の時期が推察される。総じて遺物は少ない。3は土師器である。



第5図 3号住居跡出土遺物実測図

#### 4・4、5号住居跡（第6図）

本住居跡は、3号住居跡の東側10mに位置して検出された。北西隅部と東南隅部をそれぞれ道路、畑地の調査区外に置き全体プランは不明である。調査範囲で推測すれば主軸をN-29°



第6図 4号住居跡と出土遺物実測図

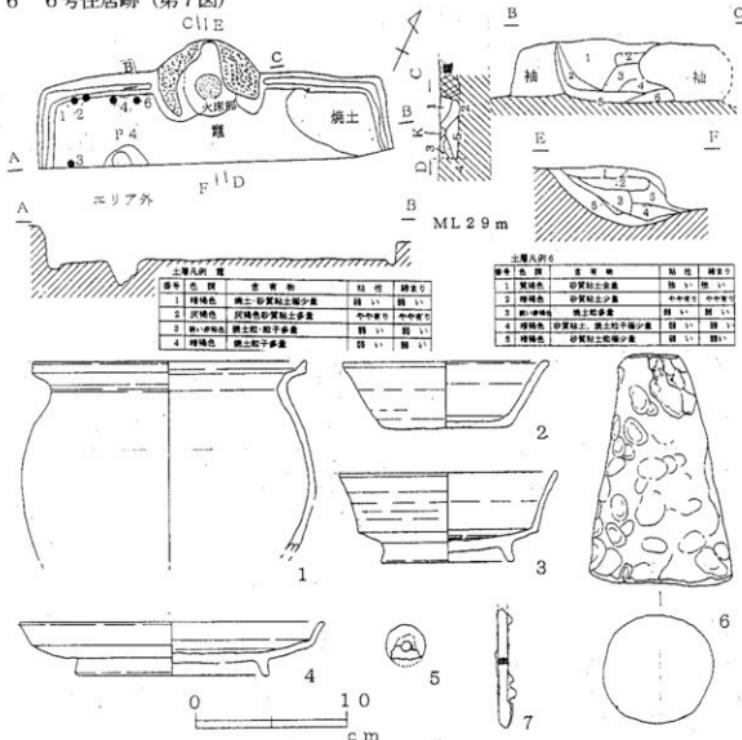
—Eに置き、推定で東西南北3.7m前後の方形プランを呈する住居跡と思われる。掘り込み深さは15cmから20cmと浅く壁面立ち上がりは緩く開く。東南隅部は近世の擾乱、その他牛蒡のトレンチャーが入っていた。覆土は、3層に分けられ確認面では黒褐色で床面近くに灰褐色の粘土が見られた。1、2層とも粘性、締まりは弱い。3層はややある。層序から自然埋積の可能性が強い。甌は出土遺物から北壁に存在すると思われるが、未掘のため不明である。

床面は総じて締まりは良く、平坦である。緩く北側に傾斜を示す。

遺物は少なくピット内出土の甌を除けば、总数で57片を数えるのみである。1は長胴形の甌で口縁部、胴部の一部であり頸部は「く」の字状を呈し開き、器肉は薄い。内外とも粗雑なナデ調整が施されている。2はピット内部から出土した台付き皿で口径11.7cm輪幅成形である。1と3とでは時期に差が見られる。3は大型の碗状坏でやや古い時期で本跡の時期とはやや差が見られる。1、2が本跡の時期の遺物と考えられる。平安時代初頭か。

5号住居跡は2号住居跡の東側3mに検出された甌のみの住居跡で、すべてを畠、エリア外に位置していた。遺物も皆無であるが周辺の遺構と大差は無いと思われる。

#### 6 6号住居跡（第7図）



第7図 6号住居跡と出土遺物実測図

本住居跡は3, 4号住居跡の間に検出された住居跡でエリアぎりぎりまで調査した。よって竈、柱穴等が確認できた。主軸をN-24°-Wに置き東西4.6m南北は不明であるが東西同様な規模と推察され、方形プランの住居跡と思われる。掘り込みは20cm程で浅く、壁面は垂直に近い掘り込み。竈を北壁中央に置く。調査は全体の1/4前後であろう。

覆土は、5層に分類されたが大半は竈からの流れたもので4, 5層は住居跡のものと思われる。粘性、締まりは弱い。

竈は北壁中央に位置し、遺存状態は良い。袖部はハの字状に包み込む感じで造られていた。煙道部、火床部とも良好な状態で検出され火床部はやや中程に位置し円形状でやや掘り込む。灰原は明確ではない。

床面は調査範囲では良好で、竈周辺は特に良い。東側隅部に焼土の塊が見られた。柱穴は、西側に一ヶ所認められた。掘り込みは深さ40cmを測る。

遺物は少なく（面積的にも小さい）甕、盤、壺、土製支脚等がみられた。いずれも西北の隅部周辺にまとまって出土している。図示したものはいずれも床直、及び近い出土状態。1は土師器中型の甕で、胴部は弱く張り球形状で頸部は「く」の字状で短く外反し口唇部は三角形に短く立つ。ナデ調整がなされている。周溝から出土している。2, 3は甕の近くから出土した平底と高台付き壺で2は体部は強く外反し口唇部は丸く治め開き気味。3は器内が薄く直立気味で口唇部は尖り気味。高台は直立気味で短い。いずれも輪轂成形である。4は口径20.2mmほどの盤で脚部は短く体部と底の境目に付けられている。口縁部は開き気味。5は土製丸玉一部欠、重さ3g。6は土製支脚でほぼ完存し三角形形態をもち長さ15.3mmを測る。7は鉄族で茎部分を欠失している。現存7, 8cm錆化が進む。時期は奈良時代末。

## 7 7号、8号住居跡（第8図）

本住居跡は、4号住居跡の東側に検出された住居跡で北側を戦後の溝と現在の道路によって擾乱、エリア外になっている。主軸をN-30°-Wに置き東西4.3mを測る。南北方向では前述の様に2, 3号溝によって擾乱、又、道路によって不明。掘り込み深さは40～50cmを測る。壁面立ち上がりは垂直に近い。

覆土は7層に分けられた。確認面では暗褐色、下部、床面では褐色で、層序は自然埋積を示す。粘性、締まりは弱い。竈は北壁に存在すると推察されるが、前述の様に確認出来なかった。床面は、擾乱部（甘諸貯藏穴）を除いて良く締まっていた。壁面にはやや幅広な周溝が巡っている。擾乱部を避けて柱穴が二基検出され円形状で径40cm前後、60cm程の深さに掘り込んでいる。形態的にはU字状の掘り込み。

出土遺物は、図示した土製丸玉二個が見られたが土器では図示できるものはなかった。

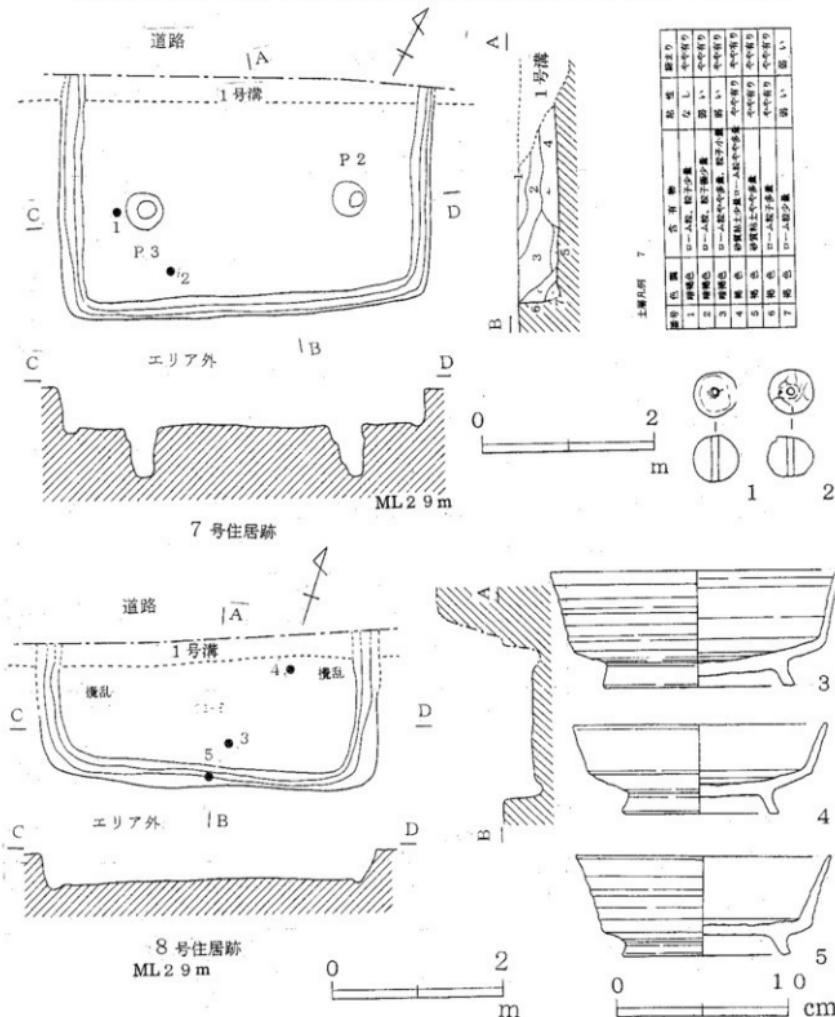
8号住居跡は7号住居跡の東側に近接して検出された。7号同様北側を2, 3号溝、道路によって擾乱、未掘区になり全容は把握出来なかった。主軸をN-15°-Wに置き、掘り込み深さは30～35cm前後を測り、壁面立ち上がりはやや傾斜をもつ。

覆土は4層程認められ、確認面は暗褐色、ほぼ7号住居跡同様で自然埋積が推察される。

粘性、締まりも同様なものであった。竈もエリア外に位置していると推察され不明。

床面は、甘藷貯蔵穴が二箇所見られた。その他は比較的締まりは良い。壁面に沿って周溝が検出された。柱穴は擾乱（甘藷貯蔵穴）のため確認出来なかつた。

出土遺物は少なかつたが、図示した須恵器高台壺が周溝部、床面から出土した。いずれの高台



第8図 7, 8号住居跡と出土遺物実測図

も短く「ハ」の字状に開く。端部はカット状である。1の体部は器肉が薄く立ち上がりは弱く開く、深さは9 cm程を測り口径も17 cmと大型である。2の体部は開いて立ち上がり口唇部は尖り気味で3 cmと浅く口径も15 cmと一段小ぶりの形態である。3は、高台が端部に位置し体部は開きながら器肉を減じ口唇部は尖る。底部は平坦である。いずれも轆轤成形で4を除き成形痕を顕著に残す。4はナデ調整が施されて轆轤痕は明瞭ではない。

時期は出土須恵器高台の器形から、7号よりやや新しい平安時代初頭が推定される。

### 8 9号住居跡（第9図）

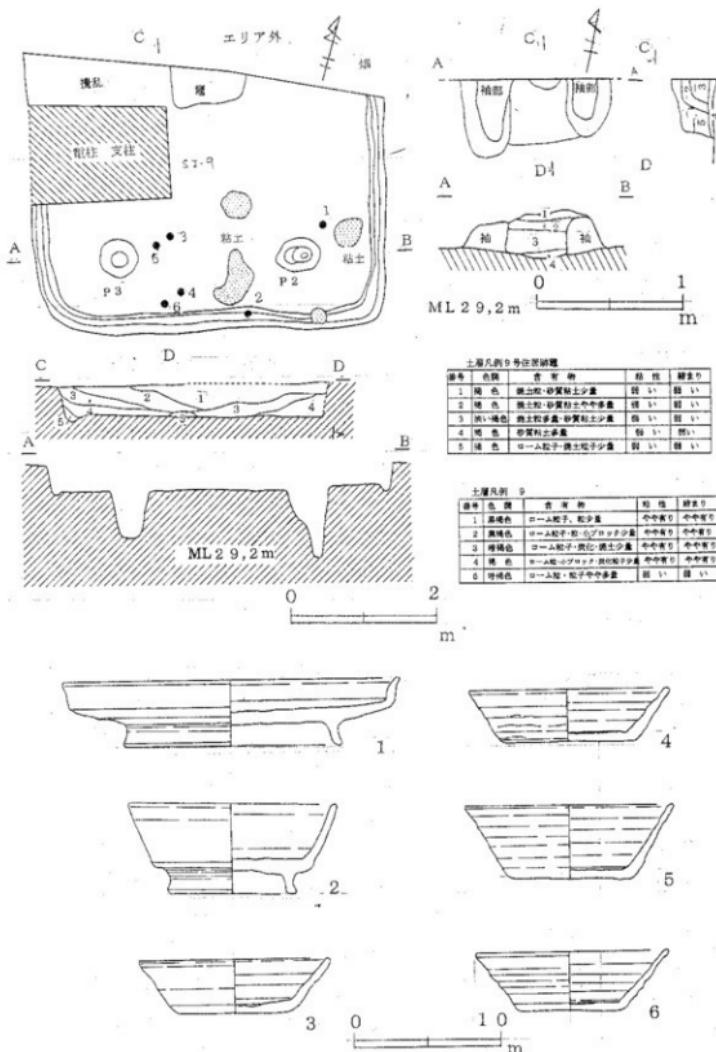
本住居跡は現道路北側に位置し、東側になだらかに傾斜を示している。北側は調査区外に位置し竈は一部が調査されたに過ぎず、また中央西側には電話線控えのコンクリートが存在し、調査に制約を受けた。主軸をN-17°-Wに置き東西4.7 mを測る。主軸方向は未掘のため不明であるが、西側の調査範囲からほぼ同様な長さと思われる。所謂方形プランが推察される。掘り込み深さは東側で30 cm、西側で40 cmを測り、壁面はやや開き気味。

覆土は5層に分けられ確認面では黒褐色を呈していた。層序からは自然埋積が考えられる。各層とも粘性、縮まりはややある。床面近くには白色の粘土塊が三箇所ほど散在して認められた。

竈は袖の部分のみの調査で全容は把握出来なかった。調査部分から推察すると直線的な袖を持つ形態と思われる。火床部が僅かに覗いていた。灰原は竈前面に僅かに認められた。

床面はほぼ平坦であったが中央部、竈前面、以外は締じて縛まりは悪い。ほぼ平坦に推移していた。周溝は調査範囲では幅広で深めに検出された。柱穴は二箇所検出され円形、楕円形状と分かれれる。掘り込みも二段に掘り込む2と円形状からU字状に掘り込む3がある。掘り込みは9.5 cmと60 cmと深さに差異が見られる。使用柱の相違からか。

出土遺物は、須恵器が多数を占めた。図示したものは總べて須恵器で盤は口径23 cmを測る。体部は直立気味に立ち口唇部のみ開く。高台部は、やや内側に位置し弱く張る。ナデ調整が施されている。2は、碗状器形で体部は外反しながら立ち上がり口唇部は内側にカット状、高台はやや端に位置し直立気味。轆轤成形でナデ調整。3からは平底で口径は13.5乃至14 cm前後で深さは5がさも深く5 cm、4 cm、3.5 cmと三段階になる。器形はいずれも外反しながら立ち上がり器肉を減じる5、6が見られる。轆轤成形で一部にナデ調整も見られる。時期は須恵器の形態等から平安時代初頭～前半が考えられる。須恵器底部はナデ調整が多い。



第9図 9号住居跡と出土遺物実測図

## 9 10, 11, 12, 13号住居跡（第10図）

10, 11, 12, 13号住居跡は道路北側に位置し、ほぼ並列している。1号住居跡の西側に検出された遺構群である。いずれも調査範囲が狭いため遺構確認状態範囲の調査であった。

### 10号住居跡

本住居跡は遺構の南側部分のみで、東西2.8mと小型の遺構で主軸はN-52°-Wに置くと思われる。掘り込みは50cmを測りやや深い。壁面は開き気味に立ち上がる。

覆土は、確認面で暗褐色、褐色で粘性、縮まりは弱い。層序、堆積状態からは自然埋積が推察される。竈は前述の様にエリア外に大部分位置し確認出来ない。プラン等から東壁乃至北壁に位置するものと思われる。遺物は、図示した1, 2が主な物で1は土師器碗で体部は器内を減じて立ち上がり外反する。口唇部は尖り気味、口径14.1cm。高台はやや端部に位置し、短く角張る。轆轤成形で高台部分にナデが見られ内黒。2は刀子状の鉄製品で刃部先端は欠失している。遺存長6.5cm、刃部長4.5cmである。鋳化が進行している。

### 11号住居跡

本住居跡は、10号住居跡の南側に位置し電話柱と現道路の為竈部分のみの調査であった。依って竈の断面図と平面のみの図示である。層序は図示した様に8層に分けられた。確認面では砂質粘土、赤褐色の煙道部等が認められていた。土層中央には赤褐色の火床部が見られ煙道部に続く状態が観察される。平面図からは円形状のプランの竈と推察される。遺物は3の手づくね土器が砂質粘土の中から出土している。

### 12号住居跡

本住居跡は、10号住居跡の西側3mに位置して検出された。南側は現道路、北側はエリア外に位置し調査出来たのはピットの位置関係から住居跡中央部南側の一部と推察される。主軸は不明であるが、検出された壁面方向からW方角にかなり大きく振れると推察できる。

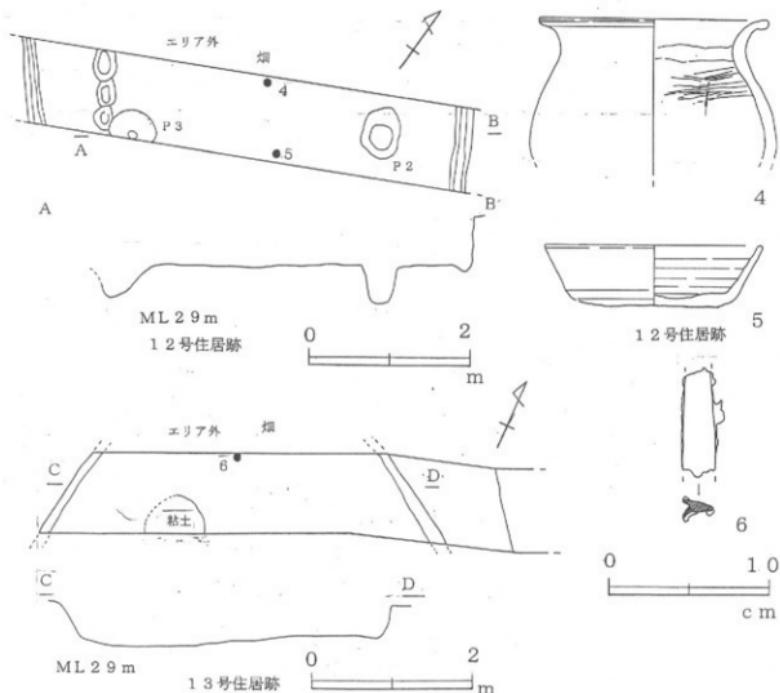
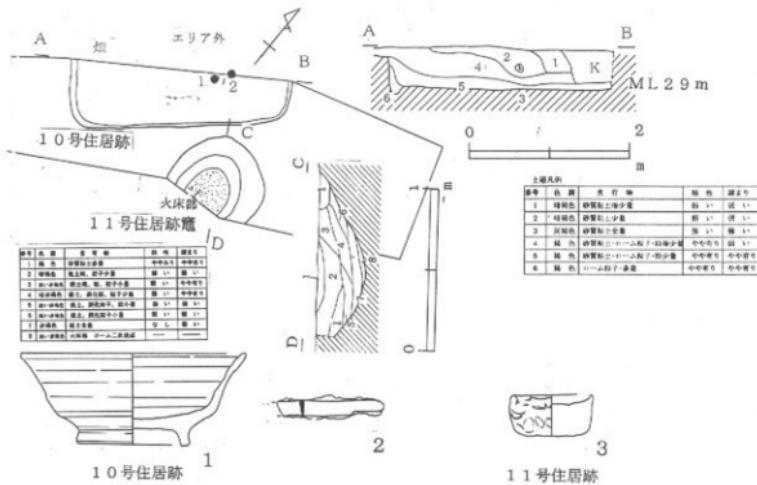
東西で約7mを測り、かなり大型の遺構と推定できる。壁面は直立気味で、掘り込みは60cmを測る。柱穴は2ヵ所確認され楕円形状で径50~60cm、掘り込みは40~50cmU字状の掘り方である。西側のピット周辺には円形状の小穴が連続して掘られていた。

覆土は図示しないが5層にわけられた。層序は、レンズ状のほぼ自然堆積が認められる。

竈は未検出。床面はほぼ平坦、縮まりは良い。壁面部には幅広で深めの周溝が認められる。遺物は図示した4, 5, 6が出土している。口径14cmを測る小型の甕は頸部はくの字状を呈し口唇部は水平に近く開く。胴部は球形状に近い。やや古手。外面はナデ、内面は刷毛調整が見られる。5は60%ほど残存する須恵器壺で器形は、平底から器肉を減じながら外反して立ち上がる。内面は轆轤痕を残すが外面はナデ調整が施されている。口径13.5cm高さ3.7cmを測る。6は動の片側か、鉄製の刃部をもち片側には木製の物をくい込ませたて様にV字状を呈する。現長は10.5cmである。調査区中では最大の規模をもつ住居跡で、時期は奈良時代末か。

### 13号住居跡

本住居跡は、12号住居跡の西側に1mに近時して検出された。本跡も12号住居跡同様南側を現道路、北側を畑のエリア外に位置し調査部分は極一部であった。掘り込みは40cm深い。床面は二色に分かれ複合の可能性が窺える。遺物は図示出来る程のものは無い。



第10図 10, 11, 12, 13号住居跡と出土遺物実測図

## V 土 坑

本調査区では4基の土坑が検出された。規模プランともそれぞれに差が見られた。

### 1 1号土坑（第1-1図）

本土坑は道路北側の擾乱層の中に僅かに検出されたもので三角形状であり本来の形は不明。大半はエリア外の畠に位置すると思われる。確認面では黒色の土層で異色のものであった。遺物は皆無で時期等は不明。東側は甘藷の貯蔵穴、溝状の擾乱が入っていた。

### 2 2号土坑（第1-1図）

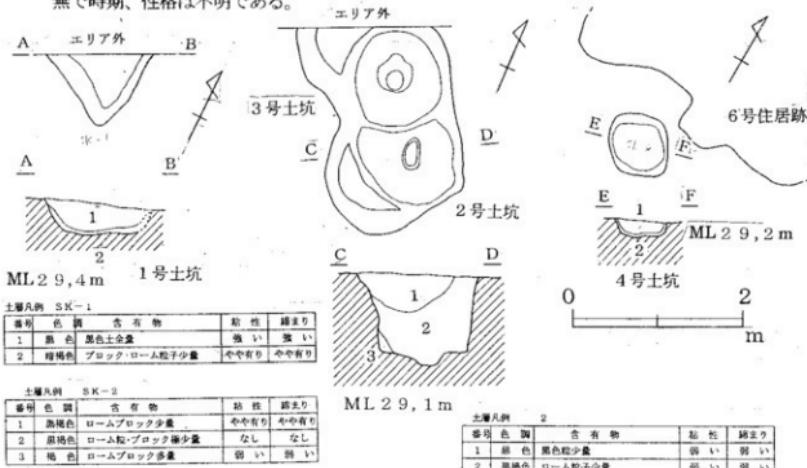
本土坑は、1号住居跡の東側に位置して検出された遺構である。確認面でセメント瓦の一部が検出されたが、プランが大きいもので調査を行った。上端径3mの円形状プランで2基連続して営まれた甘藷貯蔵穴と推定される大穴であった。掘り込みは1mと深く、底部中央部に長円、楕円の水抜きと思われる小穴が穿たれていた。今日まで多くの調査を行ってきたがこの手のプランを持つ甘藷穴は長年の調査でも検出されなかつた。右側の中段に足場が認められる独特的の掘り込み、本地域では類例はない。セメント瓦から戦後の遺構と思われる。

### 3 3号土坑（第1-1図）

本土坑は、2号土坑と切り合い同形、同種のもので規模、プランも差異は少ない。土層は3層に分けたがロームブロックの量の差で締まり粘性、色調等に特別な差はない。3はロームブロック層である。遺物はコンクリート瓦の破片が認められ2同様の時期が推察される。

### 4 4号土坑（第1-1図）

本土坑は6号住居跡の北側に検出された方形状の遺構である。一辺約60cm程のプランを有し掘り込みは15cmと浅い。壁面はだれた立ち上がりを示し底面も凹凸気味である。覆土は2層に分けられた。確認面では黒色、下部は黒褐色で締まり、粘性は弱い。遺物は皆無で時期、性格は不明である。



第1-1図 1, 2, 3, 4号土坑実測図

## VI 溝

本調査区からは4条の溝、「道」状遺構が検出された。

### 1 1号溝（第12図）

本溝は、3号住居跡の中から検出されたもので北側は道路、南側は畠の為住居跡の範囲のみの調査である。長さ3.1m、幅1.5m程のもので掘り込みは緩いU字状形態の掘り込みである。

覆土は投げ込みの感じで4層に分けられたが1層は凡て溝の層序で黒褐色である。

2層からは土坑状の感じでローム多量の黄褐色、3層は黒褐色の繰返しであり、粘性締まりはない。

遺物は常滑焼き水瓶の一部、小破片が2点出土している。遺物からは江戸時代以降の遺構と推察される。

### 2 2, 3号溝（第12図）

本遺構は、7, 8号住居跡の北側に検出され西側に続く溝で2号溝は道路に沿って西側に続く、3号溝は道路下に入り込み不明。いずれもセメント瓦の破片が出土する溝で近世の溝、道状の遺構と推察するが、覆土の締まりは弱い。

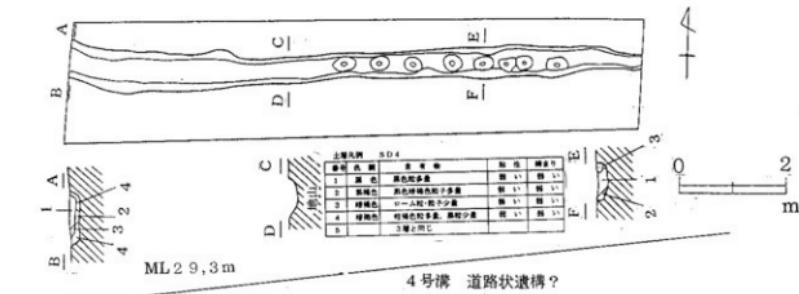
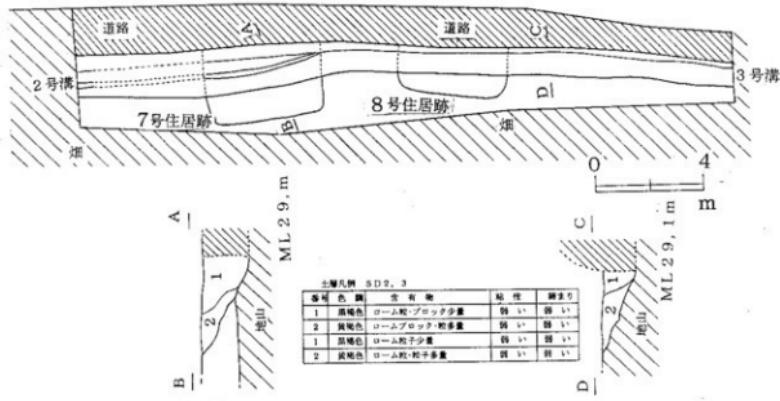
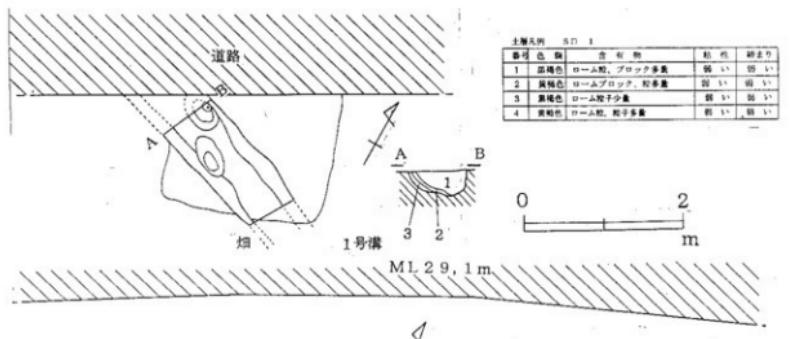
覆土は褐色で粘性、締まりは弱い。性格は不明。以前は道か。出土した瓦から戰後に埋没したと考える。

2号溝も同様であるが方向は調査区に平行して西に10m程伸びてから道路下に入り込む。時期は3号溝が2号溝を掘り込む。いずれも昭和期の遺構と思われる。

### 3 4号溝状遺構（第12図）

本溝は、道路北側に位置して検出されたもので前回の平成4年の調査で道路跡として報告された延長部で今回の調査では『道』とは断定出来なかった。長さは10.6mほどの長さで確認された。幅は最大80cm、最小幅40cmと振幅がある。所々に黒色の粒の小穴が認められた。

前回の調査の2号道状遺構に接続するものである。一部硬質部分もあり『道』も否定は出来ないが断定も難しい遺構である。遺物も皆無に近い。



第12図 1, 2, 3, 4号溝、溝状遺構実測図

## VII 総 括

本調査区域は、現道路の左右に分かれ多くの遺構が畠、道路のエリア外に位置し完掘出来た遺構は僅かに住居跡1軒であった。以下検出された住居跡の特徴と遺物を総括し結びにかえたい。

検出された住居跡は13軒で、切り合い関係は無く、いずれも単独であった。しかし道路の調査と言う宿命で完掘出来たものは1軒のみであった。これらの主軸はすべてW一方角に10°～30°前後の振れが見られE一方角のものは1号住居跡の造り替えのみであった。

竈が検出された住居跡は4軒であったが、他の8軒も存在が推察できる。1号住居跡は北側に廃棄された竈を持ち東側に廃絶直前まで使用していた竈が検出された。6号住居跡は竈側の小面積の調査であったが本体の遺存状態は良好であった。9号住居跡では袖部のみの検出である。形態的には袖部を直線的に延ばすものとハの字状のものが見られた。これらは特別に大きな時間的な差はない。用材としての砂質粘土も1号住居跡東側において省略が認められたが粘土に差異は無かった。

出土土器甕の形態では胴部に張りを持つものから、長胴形へと変化し大型から小型の器肉の薄い粗雑な器形に変化している。

壺は土師器、須恵器を問わず高台付と平底の二種類認められた。口径は14cm前後と一定しているが底部の径には差が認められる。器形自体は体部が器肉を減じて開いて立ち上がるものと一定の厚みを持つものに分かれた。これらは土師器、須恵器に共通していた。4号住居跡出土の碗状の土師器は時間的に差があり一時期前のものであり、12号住居跡の壺も同様である。

壺蓋は天井部に膨らみを持つものとやや扁平な物が3号住居跡から出土している。宝珠形の壺蓋も同様に膨らみを持つものと扁平とに分かれ、カエリ部も長短に分かれた。これらは時期に小差が認められるが混在していたと考えられる。

台付き皿は二点検出され台部の長短、端部の開きに相違が認められる。いずれも土師器であった。

盤型土器は2点確認された。6号住居跡出土のものと9号出土では皿部の口径、開きに差が見られこれも時間的差と推察される。大差ではない。これらの出土土器はすでに専門集団、在地「釜」の存在が肯定できる焼き方である。霞ヶ浦町のみならず近隣にも釜は存在したと思われる。

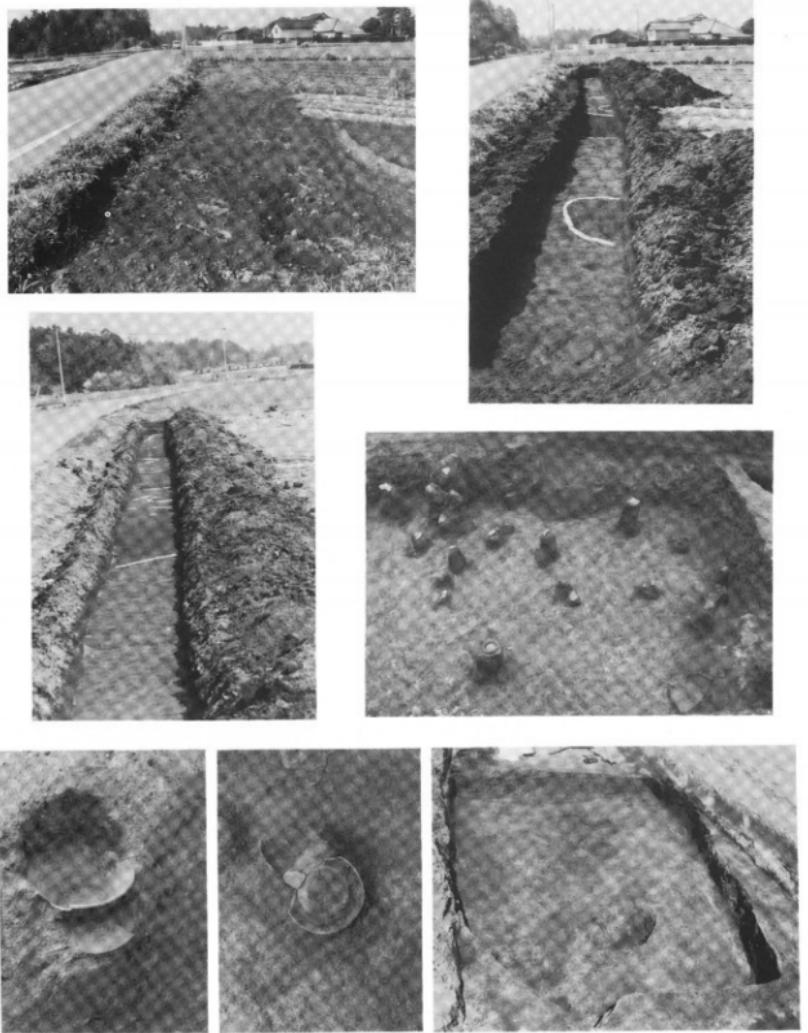
地形的に浜地区から谷島、八木蒔、羽生、沖洲の台地に可能性は高いと思われる。

土製支脚は二点検出された。いずれも三角形状形態を持つと思われる。

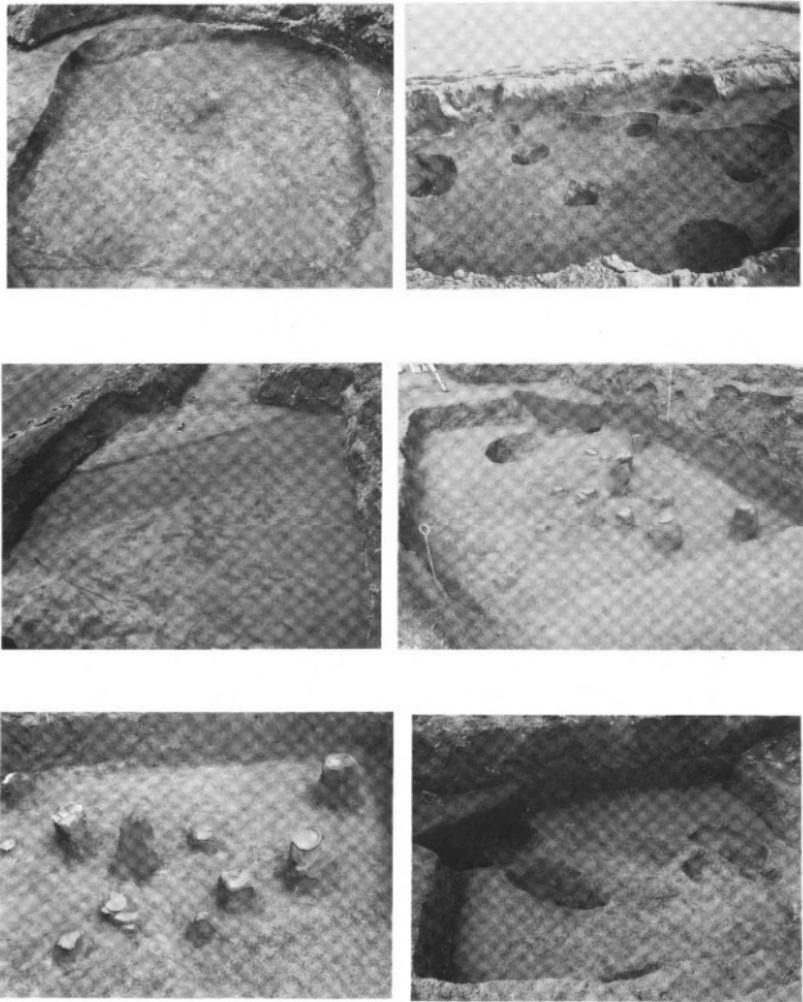
鉄製品は刀子、鋤状、鉄族状の三点が出土している。いずれも錆化が進行し遺存状態は余り良好では無い。

遺物から、本集落は八世紀から九世紀前半にかけて営まれた集落の一部と考えられるが、現道路の左右と言う変則的な調査であったことが悔やまる。

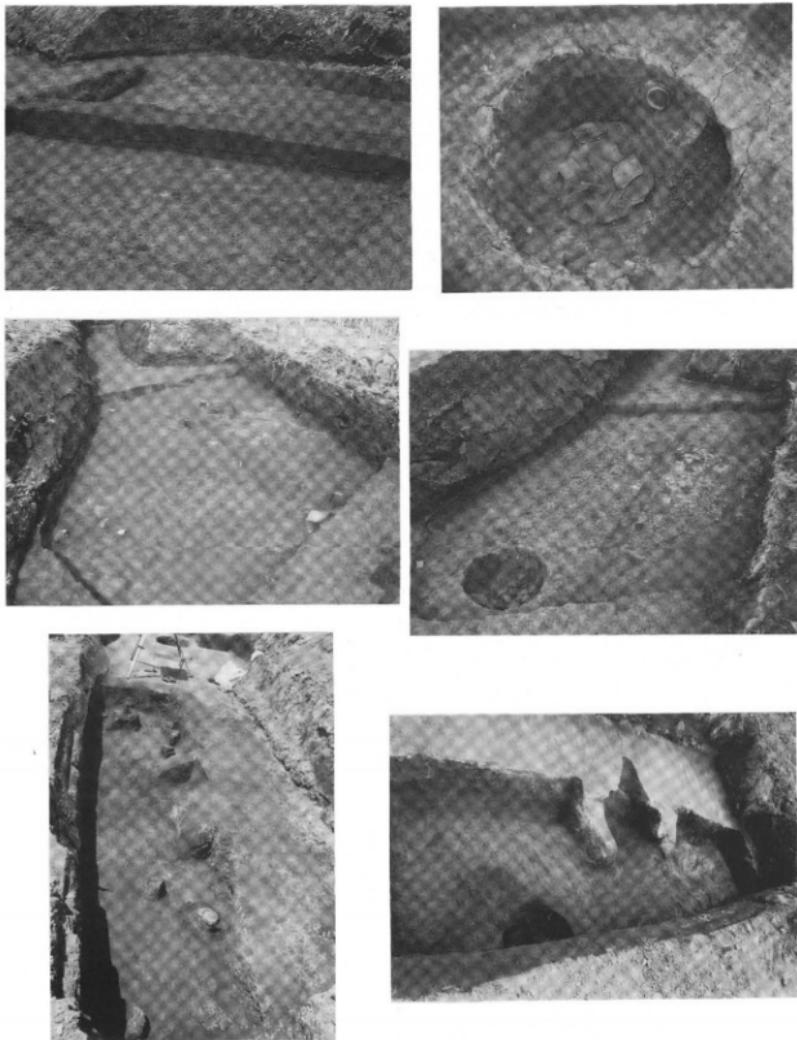
ほぼ、水田耕作主体に変化する体制の中で、奈良時代から平安時代にかけて短い時間ながら、台地中央部に集落が存在している事は今後の調査と本時代の政治と社会体制を理解するうえで欠く事の出来ない遺跡と考えられる。



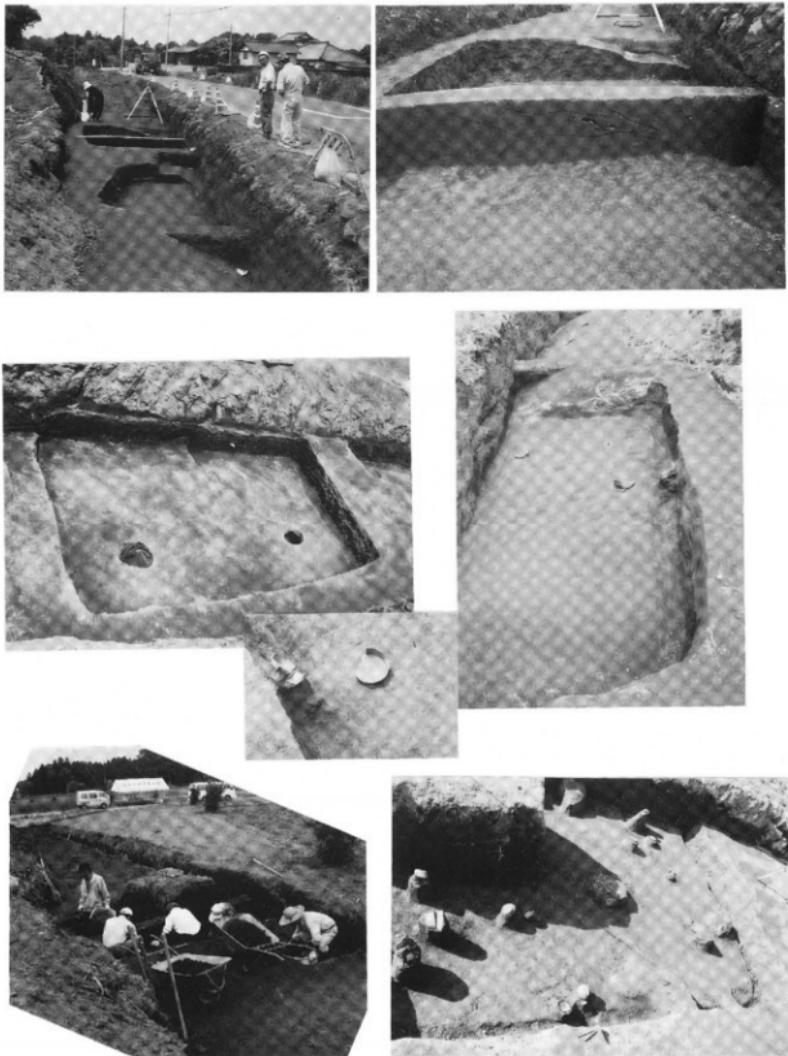
PL-1 調査前 左上 遺構確認 右、右中 一号住遺物 中左、下 遺物 完掘



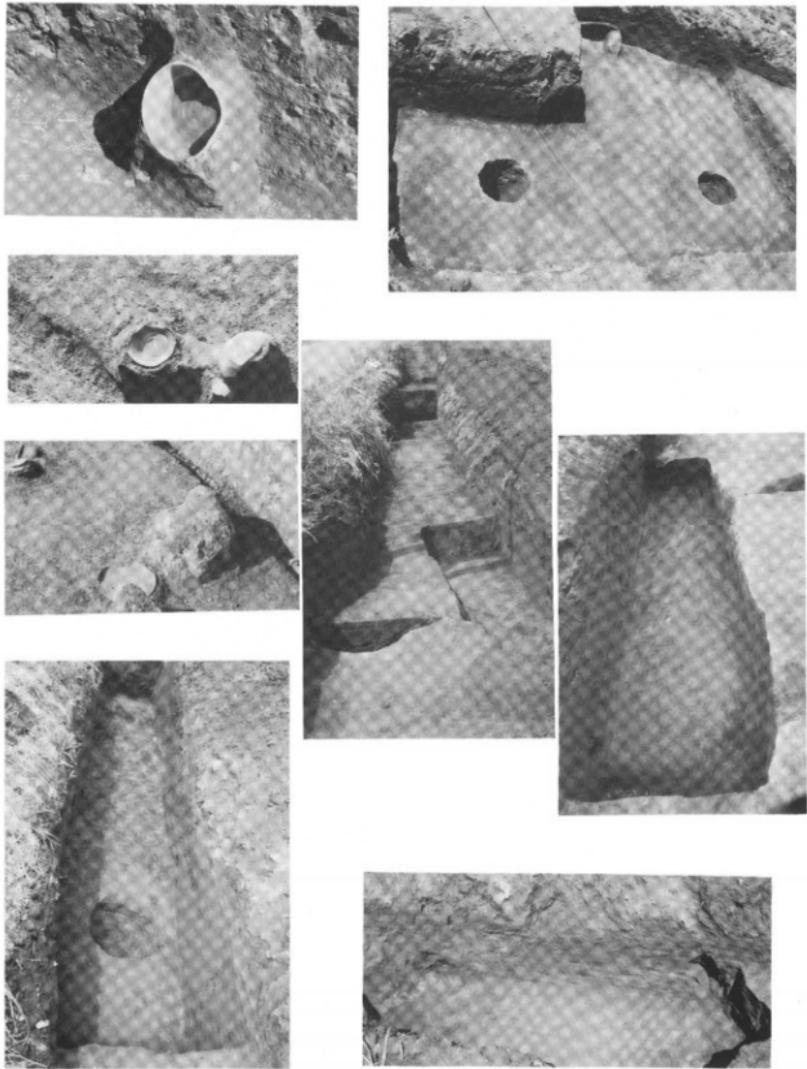
PL.-2 2号住居跡と3号住居跡



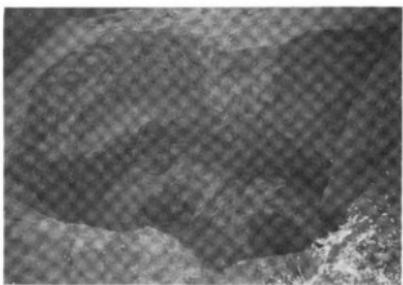
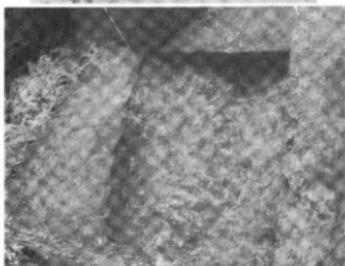
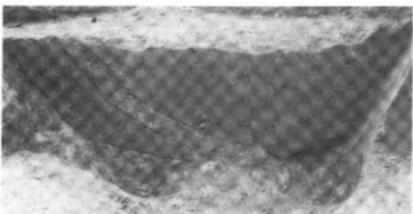
PL-3 4号住居跡 6号住居跡



PL-4 7、8、9号住居跡



PL-5 9号住居跡、11号住居跡、12号住居跡、13号住居跡



PL-6 1号沟 2号沟 3号沟 4号沟道路状遗构



PL-7 出土遺物 1、3、4号住居跡



PL-8 出土遺物 6、7、9号住居跡



PL-9 10、11、12号住出土遺物

小池平遺跡発掘調査報告書

印 刷 2003年12月25日  
発 行 2003年12月25日

編 集 鹿行文化研究所  
発 行 玉造町遺跡調査会  
玉造町教育委員会

印刷所 (株) さんゆう社印刷